

Title	<書評>向井正也著 「モダニズムの建築」について
Author(s)	渡辺, 眞
Citation	デザイン理論. 1983, 22, p. 118-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52626
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

向井正也著

「モダニズムの建築」について

デザインを含め造形美術の分野でポスト・モダニズムという呼称が話題になって久しい。チャールズ・ジェンクスの言うところでは1970年代半頃からのことだそう。ということは今造形分野にかかわる学生や20才代前半の人々が造形について知り、自覚するのは、まさにこのポスト・モダニズムの時期においてであって、彼らはまさしく新しい世代ということになる。ポスト・モダニズムを担った人々は、モダニズムの中で育ち、その何たるかを知ったあるいは体験した上で、その後の展開を遂行したのであるが、新しい世代にはそういうことがない。

ポスト・モダニズムが文字通りの意味で造形史上の意義を担うとしたら、それはあくまでモダニズムを前提としてのことである。そのモダニズムが抜け落ちつつある現代にあつては、この呼称は単にモダニズムの後の時代という字義通りの意味しか持たず、造形的意義や主義・主張を持たないものになる危険がある。この呼称にこだわるか否かは別にしても、現在こそモダニズムが何であったかを問うべき時期なのである。

ここで紹介する向井正也先生の「モダニズムの建築」はこの要請に答えてくれる一書であると言える。この著書の「あとがき」を読むと、本書は1961年の学位請求論文「近代主義の建築論的研究」に基づいているとのことである。1960年代初期はなおモダニズムの中にあるが、しかしペブスナーやギーディオン等の著作のように、モダニズムについて記述、規定しつつさらにそれを動向として鼓舞し推進する役割を持つ時期とは異なって、モダニズムそのものを総括すべき、またそれが出来た時期であったと言える。モダニズムの建築に対する著者の捉え方も、このような態度が基調になっていると思われる。以上要するに、「近代建築」が初期以来一貫して持ちつづけた最大の特性の一つは、その形式主義的傾向であった。…「建築家」は20世紀に入ってから、「形式」¹「form」の問題はいつの場合においても最大の関心事であったことは見あやまれやすい重要な事実である。(同書P.108) この指摘の意味するところを、モダニズムの形成展開過程に関与しつつ見きわめることは容易でないし、また適切であったとも言えない。「近代建築」はその後、1925～30年にかけヨーロッパにおける合理主義の段階で、表面は形式主義を払拭したかのような形で発展するが…(同書P.109)とされているように、機能的合理的な造形が追求されている時期にとっては、まさにそれがその時の課題・目標であつて、その時に形式主義が持ちだされることは的はずれでしかない。

それに対して近代建築の展開を現実として冷静に分析し把握する時、そこに造形形式あ

るいは様式の問題が建築家にとっての最大の関心事となっており、それが建築家の態度の基調を形成していたという向井先生の指摘は、単純にモダニズムに加担するあるいは批判するという立場ではなく、モダニズムそのものの理解を第一とする態度から来ているものであると推測する。同様の作業が近代デザインの展開についても早急に望まれるのである。

本書第2部において建築意匠の問題が具体的に扱われている。そこで取り上げられている「ヴォリューム」「空間とスケール」「テクスチャ」「対比」等は、建築造形だけでなく、近代造形一般にとっての核心をなすものである。それが建築の専門家でもない私にとっても理解し易く、デザインや絵画・彫刻などを考える上で示唆に富む内容となっている。

個人的感想であるが、この中でモホリ＝ナギーへの言及が多いのを見て、学生時代の頃を思い出した。私の学生時代は1960年代後半から70年代初めにかけてであるが、その頃モホリ ナギーの著書は、仲間の間では一種のバイブルとなっていて、私自身モホリ＝ナギーから出発し、デザイン造形ないし造形一般についての考え方の基礎はそこで形成された。向井先生と私達では世代が異なると言っても許されると思うが、その先生がモホリ＝ナギーに対して深い関心を持たれていたという事実を前にして、逆に私達自身がモダニズムの中で育ったということをも新たに認識させられた思いであった。

ともあれ今日では、モホリ＝ナギーが単なる歴史的人物、従って彼を一典型とするモダニズム自体が過去の歴史となってしまっているところの新しい世代と、私達もその末端に位置するモダニズムの中で育った世代が同居しているのである。前者にとってモダニズムの理解が必要とされるのは勿論であるが、後者にとってむしろより一層必要だとも言える。なぜならモダニズムを当然としすぎていて、それを冷静に対象化できなくなっている危険があるからである。

最後に本書についてあえて無い物ねだりをすれば、機能主義がモダニズムにおいて果した意義についてももう少し向井先生の考え方を示してほしかったと思った。しかしこのことは逆に言えば、本書が、モダニズム的思考において機能主義的思考が表面化し、形式主義的側面が主張されることがまれであったことに対する批判、言い換えれば形をかえた機能主義批判としての意義を持つことを意味しているとも言えよう。

(京都市立芸術大学 渡辺 眞)